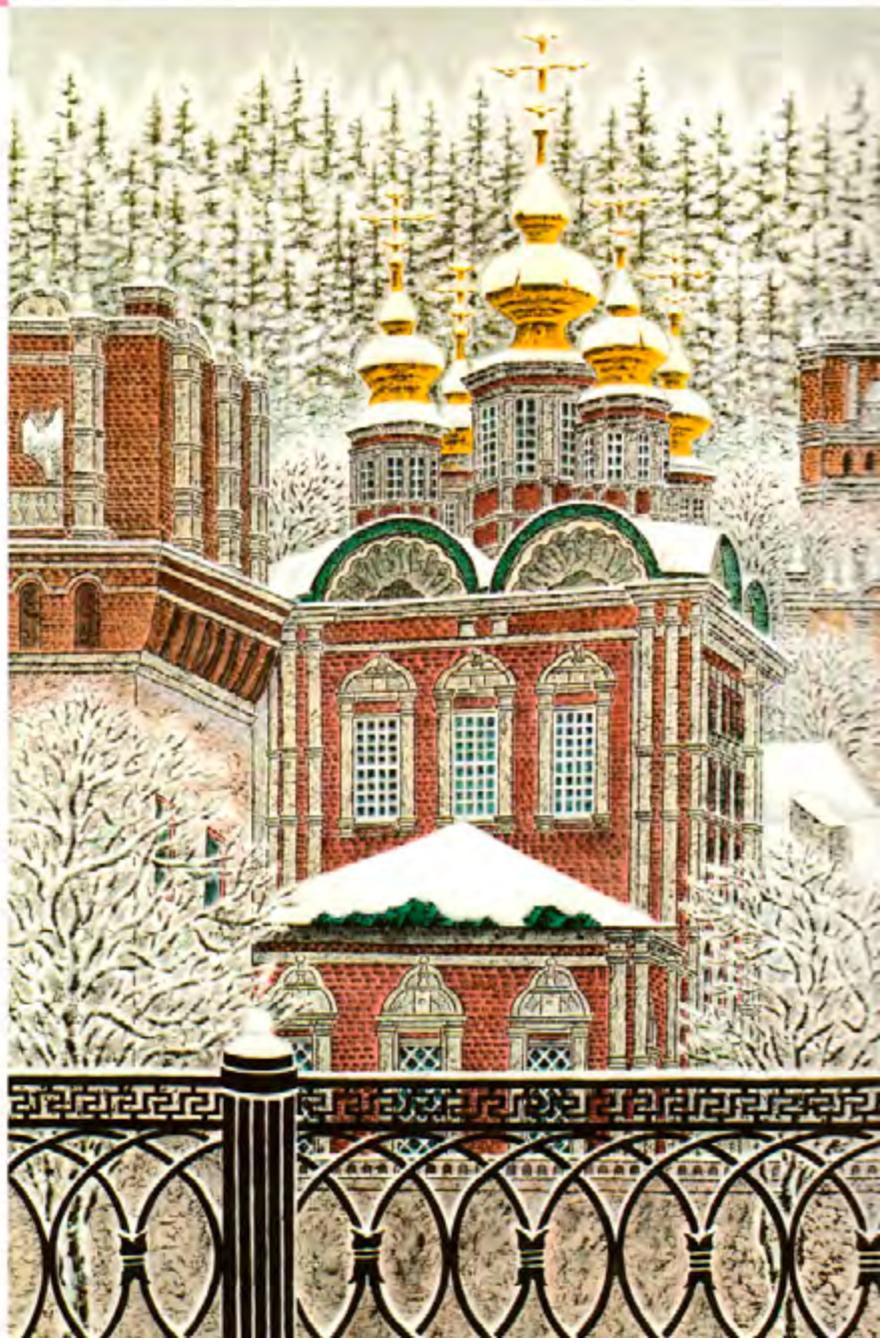


冲

2
2018

世界雜誌(32)



スーパームーン 能村 研三

主宰からの宿題

崖水柱潜りて鵜様捕らふ頃

年忘れ敢へて四番下足札

大年のごみ捨て三昧てふ愉悦

産土神へ遅きを詫ぶる初参り

狐火やスリッパイヤよく鳴けり

日脚伸び龍角散の微小匙

妻の薬分けて貰ふや風邪癒えず

火酒をもて強気の雪に抗へり

初風へスーパームーンの道真直ぐ

春を待つ逸り鎮めのリバーシブル

昨年は「沖」にとつてすばらしい年であった。春に千葉県俳句作家協会の俳句大賞準賞に広渡敬雄さんの句集『間取図』が、同奨励賞に栗原公子さんの句集『銀の笛』がそれぞれ受賞。夏には「俳句四季」の全国俳句大賞に能美昌二郎さんが受賞、さらに秋には私が千葉県教育功労賞の受賞の知らせを受けた。そしてこのたび、俳人協会第四回新鋭俳句評論賞に沖の一番若手の鈴木光影さんが受賞した。鈴木光影さんの評論『「合掌部落」の時間・吹田操車場』の時間―登四郎と六林男の交差点』は、論文冒頭に二人の句集の後記の相似点など引用し興味深い論文となった。

この授賞をきっかけに、沖の若手の二人に宿題を与えることにした。若手の一人は今回の受賞者の鈴木光影さん、もう一人は稗田寿明さんと稗田さんは十二月、一月と連続巻頭をとっている人である。

そもそも、この宿題の発想は昭和三十年代に「俳句」の編集長であった大野林火が当時新進気鋭の登四郎と沢木欣一に夏休みを前に俳句の大作の宿題を出したことから来る。その宿題をこなすために登四郎は飛騨

白川村におもむき「合掌部落」を、沢木欣一は能登の揚げ浜塩田に取材し「塩田」の大作を発表した。この二つの作品は俳壇史上で多くを語られる作品となったことは言うまでもない。

さて、宿題の内容なのだが、とりあえず概略的なヒントは出したものの詳細は二人に任せ、編集長によく相談しよう話した。

『能村登四郎読本』は沖人の愛用の書であるが、巻末にある「登四郎語録」は先師亡き後も多くのごことに示唆を与えてくれるものである。登四郎、翔が作品発表と同時に書いた「五百字随想」が基になっており、登四郎の昭和五十八年までの一二五編は『鳩の手帖』という随筆集に纏められているが、登四郎が亡くなるまでの十七年間分が纏められていないのが気になっていた。そこで、若手二人に「五百字随想」の登四郎、翔の執筆をもう一度読み直し、発掘するだけに留まらず若手の感じ取ったことを伸び伸びと書いて未来へつなげてほしいと思っている。「沖」の五十周年に向けての助走となってくればありがたい。

葉喰

森岡 正作

糶 声 に 高 鳴 る 背 の 鱒 起 し
古 宿 に 腹 の 居 座 る 葉 喰
煤 払 ひ 布 袋 の 腹 を く す ぐ れ り
生 き る と は 死 ぬ と は 楯 火 弾 け を り
卒 塔 婆 の 向 き そ れ ぞ れ に 冬 ざ る る
ど か と 雪 飲 ん で ば か り も ゐ ら れ ま い
凍 鶴 の 黙 に 火 の つ く 夕 茜

蒼茫集

鳩の湖

安居正浩

天 恵

辻美奈子

鳩の湖見に来て鴨を見てをりぬ
おでん酒好みは東千代之介
*綿虫について行かないまだ生きる
祝祭に遠く離れて日向ぼこ
白鳥の気位かくも荒々し
手配済みなり煤逃げの居酒屋は

*天恵の時雨に濡れること嬉し
神おはす方へてのひら雪催
霜を来し鵜に絢爛の大広間
古戦場ひたひたと風冷ゆるかな
散紅葉くれなゐに緋を重ねけり
踏みて音なき陣跡の散紅葉

茶 房

大畑善昭

直 感

吉田政江

枯蔦が目当ての茶房先に着く
蓑のまま急ぐ蓑虫見し記憶
冬木の芽われに成すことまだ多く
*人の世の澄めよ澄めよと降る雪か
雪の湯に師の背流してをりし夢
雪降れば雪掻く暮しわが八十路

*灸られて竹の泡立つ十二月
完璧はときに重たし冬の富士
冬眠の土手へ薄日の差しにけり
直感のときに危ふし冬の星
歳晩の火災報知機ふいに鳴り
札納め墨の香つよき表書

見渡せば

千田百里

棟梁の掌

甲州千草

沖衆の統ぶ冬麗の関ヶ原
見渡せば枯野目つむれば関の声
鷹と生れて急襲を怠らず
海鼠腸をすする潮どきなど思ひ
はは似の目ちち似の指や日向ぼこ
枯葉舞ふ松村武雄忌が来るよ

納まりのよろしラ・フランスの奇数
棟梁岐阜時行の掌は聴診器十二月
寄り添ひぬはせをの杖にある枯野
城据えて時雨光りの岩の階
野鳥の森へ畳まれてゆく冬の霧
冬麗や紙の音もて葉の積もる

山を消す

宮内とし子

外は雨

栗原公子

山を消す釣瓶落しの容赦なし
鉄塔の十万ボルト山眠る
*クロワッサンに空洞のあり風邪心地
見頃とてなきかに咲きて冬桜
コーヒ―はモカ黄落の真つ只中
着膨れてゐても及ばぬ宇宙服

冬籠曇り硝子の外は雨
*裏庭はいつもひんやり石露の花
吹き止みて数ふやしたる冬の星
長き影つれて冬至の家路かな
つはぶきに屈む合槌ほしき日は
虎落笛真夜中に開くエレベーター

こけし挽く

林昭太郎

城

望月晴美

青空を独り占めして木守柿
冬に入る星座を組まぬ星々も
蛍光灯点くに音する寒さかな
枯野行く我が身に枯の及ぶまで
くれなゐは明日を期す色冬木の芽
*雪催木を香らせてこけし挽く

*紅葉山岐阜城に担がれしごと城一基
紅葉山こだまに色のあるやうな
石ころも地球のかけら紅葉坂
柿熟るる色にも重さありにけり
庁舎消えいま霜月の大地照り
草枯れて浮くサッカーの忘れ球

大冬木

柴崎英子

清澄庭園

鈴木良戈

*あつさりと逝かれて吹かる大冬木
冬苺こんない顔して遺影
夕刊の干反りさびしき十二月
喪のころ癒す山茶花金の薬
点滴のほとほと冬の深みけり
枯野ゆくもう身に何も要らぬかな

池の辺の陽を集めたる石露の花
大緋鯉澄みたる水に静止して
秋水を渡りし風を眉に受く
膨らみつ漂ひつ去る夫婦鴨
雪吊を張りたる松の威厳かな
羽ばたきて水輪を拡ぐ夫婦鴨

本北風 上谷昌憲

噴水のしどろもどろに本北風
鴨は鴨の群に紛れて安堵せり
甲斐信濃徐々に整ふ鴨の陣
注射器にわが血が吸はれ冬深む
瀬戸内の陽がころころと蜜柑箱
仔細つくせる枯蓮に雨の音

清き血 瀨上千津

冬麗の一穢だになき空信ず
暗じて湯垢離ごころの柚子湯かな
子供サイズのピアノでジャズやクリスマス
心より身に傷痕や神無月
冬泉を喫し髓まで清めけり
師に師あり清き血を継ぎ寒すばる

冬ごもり 河口仁志

一つ家に睦む二世帯晦日蕎麦
寝る前のぬくき一椀根深汁
堂塔にゐるだんまりの寒鴉
わが余生賭けて三年日記買ふ
ままならぬ手足励まし冬ごもり
先の世を見定めせむと葉喰

祈り 湯橋喜美

冬天の深きを青とこそ言はむ
大道芸失敗も芸木の葉舞ふ
霜晴の鉄柵を日が徒渡る
点滅の聖樹祈りの案なせり
納得に間が極月の訃の報らせ
魚の血の凝固の早し雪催ひ

潮鳴集



磐座 菊川俊朗

磐座や十一月の日矢射して
冬薔薇を剪る王朝は滅ぶもの
五合庵訪ふや落葉に足埋め
沓脱ぎに真つ赤なブーツ童の玉
* 葉牡丹の渦はみ出してゐる時間

蜜柑山 兵藤 恵

蜜柑山みな海光の真正面
空也より吐かれし息は綿虫に
* たぐりてはとほくなりゆく毛糸玉
にほどりを見てゐる息の濃かりけり
大福の館の塩味火の用心

無印良品 七田文子

フェルメールの青より澄みて秋の水
美しき狼籍さざんくわの散るは
微笑も確かな同意童の玉
* 日向ぼこ無印良品の顔で
緋の色の卓布を選りてクリスマス

白バイ 諸岡和子

落葉降る遠近法の先に塔
甲羅酒こぼして能登の海荒るる
雪囲父の流儀の縄結び
* 白バイも走者もをみな風花す
クリスマス屋根裏にある隠し部屋

鉄砲狭間

大沢美智子

* 国盗りのひづめ聞ゆる冬北斗
信長の早駆けの郷吊し柿
天空の城ふり仰ぐ片時雨
みな同じ時雨に濡れて岐阜城址
鉄砲狭間より冬ざれの淡海かな

冬りんご

小川流子

冬りんご煮る透明になる時間
日向ぼこ過去と未来の真ん中に
吾と同じ着メロの鳴り年の暮
艦綱に並ぶかもめや冬夕焼
浦安の霜除に挿す海苔簀かな

白息

大矢恒彦

* ぎんなんを鈴鳴るやうに炒りにけり
道ならぬ道に踏み入る今朝の雪
闇に浮く焚火の顔の般若面
白息が会釈の言葉包みけり
鱈酒へ寄る口笛を吹くごとく

捨身の色

佐久間由子

湧き水は村の要や冬隣
海風に捨身の色の唐辛子
* 力抜くことも身に添ひ冬ざくら
万両に身を洗はるる影法師
冬木立抜け豁然と紺の海

日本の彩

清水佑実子

* 日本の彩極めんと柿熟るる
紅ほのと千輪仕立菊迎へ
時雨来て傘傾ぎあふむすびの地
滾る血のごと逆光の冬紅葉
冬木の芽特別史跡黙解かむ

日暮れの青

井原美鳥

すれ違ふ自転車咳を落としけり
独り居に雪の日暮の青きこと
* 義士の日の前にゆるりと教習車
小庇のすずめの会話干蒲団
ストーブの青炎の揺れ妬心かも



そぞろ寒象は音なく膝を折り 下村たつゑ

象は巨体の動物だが、一つ一つの動きにも何か物悲しさを秘めていて。宇多喜代子さんに『象』という句集があり、象を詠んだ〈長き夜や身をおり膝折り遣りすこす〉という句がある。この句も動物園で象舎の前に立ち観察を続けた時に出来たのだろう。中七の「音なく膝を折り」の観察が眼目。大きな体しながらも、繊細でやさしさのある動物なのである。

茶の花や本家なくなるかも知れぬ 高木 春夫

ご本人と本家の関係はわからないが、かなり近い関係にあるのだろう。ご自身は本家を出てからかなりの歳月が経過したが、核家族化、高齢化が進む現代の世の中、本家を引き継いでくれる人に恵まれず、このままだといずれ本家も途絶えてしまふだろうという不安が過った。庭に咲いている茶の花が印象的である。

神島を指呼に鷹舞ふ風岬 大久保志遠

神島は伊勢湾口に位置する島で、三島由紀夫の小説『潮騒』の舞台になったことで有名。鷹の渡りを観察できる場所でもある。作者が詠んだ下五の「風岬」は、芭蕉が〈鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎〉と詠んだ伊良湖崎であろう。鷹は風の流れを読む習性があり、上昇気流を利用して滑空を繰り返す。

錦繡を織り候ふと山粧ふ 栗坪 和子

山野や湖畔、河岸、庭園などの紅葉はどこも美しいが、この句は京都の紅葉の雅な美しさを詠んだもの。錦繡は美しい紅葉のたとえにもなるが、錦の刺繍のような秋と詠めば一層景が映える。秋の山が「粧ふ」は、紅葉して山が化粧したようだということから使われる修辭だが、京都の歴史的背景を重ね合わせて見ていると、いつの間にか候ことばが口を衝いてしまった。

返り花褒められたくて耳を寄す 大網 健治

原句は「寄せり」であったが、「寄す」とした。返り花は十一月頃の小春日和に、桜、梅、梨、躑躅などの草木が本来の季節とは異なって咲いた花のこと。この句、中七の「褒められたくて」の擬人化がポジティブで面白い。

今過ぎし大綿といふ無音かな 岡本 秀子

大綿は雪蛭の俗称でもあるが、白い綿のような分泌物をつけて弱々しく飛ぶ。初冬のどんよりと曇った日などに道路や家の軒下などをふわーと静かに飛ぶ白い小虫で、無音の世界のまま通り過ぎて行った。(以下略)

沖作品



能村研三選

ボタン押せば渡船来る来る小春風

*そぞろ寒象は音なく膝を折り

岩に座せば遠流の心地冬かもめ

残菊の放つ光や矜恃とも

信長の胸は緋の色菊人形

*茶の花や本家なくなるかも知れぬ

かいつぶりの浮沈見飽きぬ川灯台

段取りの了へし棟梁庭焚火

秋風や夢と潰えし天下布武

楽市の歓声響く菊日和

*神島を指呼に鷹舞ふ風岬

吉良の忌や雨の千両実を零す

義士の日や吉良に忠誠二十余士

百畳の達磨絵を吊る寒波晴

切火受く畏みて受く年籠

千葉

下村たつゑ

静岡

高木 春夫

愛知

大久保志遠

*錦繡を織り候ふと山粧ふ

風垣やからりと乾く海女の桶

小春風九曜の紋の神輿倉

照柿や安房は夕日の美し国

毛糸編む針目に時を掬ひつつ

黙禱に始まる会や冬暖か

*返り花褒められたくて耳を寄す

緋毛氈に手焙りのあり寛永寺

例句あれば捨てずに使ふ古暦

冬すみれ昭和は限りなく遠し

*今過ぎし大綿といふ無音かな

落日の朱の極みもて山粧ふ

木守柿孤高の彩を尽くしけり

冬日和千体仏の深眠り

波音のはかなし十二月八日

市川市

栗坪 和子

東京

大網 健治

千葉

岡本 秀子